

1. 大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の基本的な考え方

<目的・対象者>

- 大学入学希望者がこれからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、十分な知識・技能の修得を前提に、「知識・技能を活用して、自ら問題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」（「思考力・判断力・表現力等」）を中心に評価する。

※知識や解法パターンの暗記・適用などの受動的な学びから、学んだ知識や技能を統合しながら、問題の発見・解決に取り組む能動的な学びへの発展を目指す。

<特に重視して評価すべき「思考力・判断力・表現力等」の明確化とそれを踏まえた作問>（参考資料1）

- ① 大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力等」を構成するより具体的な能力概念（思考プロセス）を整理
- ② 各教科・科目ごとに現状の課題も踏まえつつ、今後特に重視して評価すべき力を明確化
- ③ これらをよりよく評価できる作問を具体化

2. 次期学習指導要領下（平成36年度*～）で目指す姿

<対象教科・科目> [注] 次期学習指導要領の在り方については、現在、中央教育審議会教育課程企画特別部会で検討中（参考資料2を参照）

- 地歴・公民については、次期学習指導要領における科目設定等に関する検討にも留意しながら、単なる暗記ではなく、例えば、歴史系科目において歴史的思考力等を重視する方向で強化。
- 次期学習指導要領において導入が検討されている科目のうち、「数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな選択科目」に対応する科目の実施を検討。
- 数学、理科については、知識・技能に関する判定機能に加え、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を強化。
- 国語については、知識・技能に関する判定機能に加え、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を強化するとともに、次期学習指導要領における科目設定等に関する検討にも留意しながら、例えば、様々な分野の論理的な文章を読んだり書いたりする力などを特に重視して評価することについても検討。
- 英語については、ライティングやスピーキングを含む4技能の評価を重視。
- 次期学習指導要領における教科「情報」に関する検討を踏まえ、対応する科目の実施を検討。

<問題の内容、出題・解答・成績提供方式>

- 多肢選択式の問題に加え、記述式や「選択式でより深い思考力等を問う問題（例：連動型複数選択問題（仮称））（参考資料3）」などの充実を目指す。

※記述式の導入に当たっては、採点体制などの整備や採点期間の延長が必要となることも踏まえた検討が必要

- 選抜性の高い大学が入学者選抜の一部として十分活用できるような高難度の出題も含む。
- CBT-IRTを導入することを目指す。

※「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の検討状況等も踏まえ、具体的な導入方法等を検討

※検討に当たっては、受検者の進路選択への影響も踏まえ、信頼性（システムの安定性やセキュリティ、コスト等）確保を十分考慮

- 大学や大学入学希望者に対し、多段階で結果を提供することと併せ、例えばパーセンタイル値などによる具体的なデータを大学に提供することを目指す。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の主な論点整理（検討・たたき台）

<実施方法>

- CBT-IRTの導入を前提に年複数回実施できる仕組みを目指し、高等学校教育への影響や大学等の負担なども踏まえつつ、適切な実施方法を検討。

※「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の実施時期や、大学の個別選抜の日程等を考慮

- 受検料は、1回当たりの検定料が適切な価格となるよう設定。

<民間の知見の活用>

- 英語は、入学者選抜としての妥当性や信頼性、試験実施体制、費用負担や受検機会の確保、継続性・安定性に留意しつつ、4技能試験の実施に向けて、民間との連携の在り方を検討。別日程での実施も検討。

<活用の在り方>

- 各大学の特色等を踏まえたアドミッション・ポリシーに基づき、各大学において活用。

(注)

CBT: コンピュータ上で実施する試験。

IRT: 各問題の難易度を考慮して得点を出す仕組み。複数回受験する場合に回ごとの試験問題の難易度の差による不公平を排除することが可能となる(例: TOEFL, 医学部共用試験等)。その導入のためには、事前に難易度推定のために全ての問題を試験することや多量に問題をストックすることが必要。

3. 現行学習指導要領下（平成32～35年度）

<対象教科・科目>

- 次期学習指導要領の議論の方向性を勘案しつつ、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力等をよりよく評価。
- 各教科・科目の出題内容については、次のような方向で改善。
 - ・ 地歴・公民については、単なる暗記だけではなく、例えば、歴史系科目において歴史的思考力等を重視。
 - ・ 数学、理科については、知識・技能に関する判定機能に加え、思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を重視。
 - ・ 国語については、知識・技能に関する判定機能に加え、例えば、言語を用いて論理的に思考する力などの思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を重視する。
 - ・ 英語については、ライティングやスピーキングを含む4技能を重視して評価する方向で検討。
- 試験の科目数については、大学入試センター試験より簡素化。

<問題の内容、出題・解答方式>

- 多肢選択式の問題に加え、短文記述式や「選択式でより深い思考力等を問う問題(例: 連動型複数選択問題(仮称))」などの導入を目指す。
※記述式の導入に当たっては、採点体制などの整備や採点期間の延長が必要となることも踏まえた検討が必要
- 多肢選択式の問題についても、例えば、各教科・科目の特性を踏まえ、問題文を長文化する、複数の回答のある問題を出題する、他の教科・科目や社会との関わりを意識した内容を取り入れるなどの改善を検討する。
- 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の検討状況等を踏まえつつ、CBT-IRTの具体的な導入方法や導入時期等を検討。

<実施方法>

- CBT-IRTの導入の検討状況や、高等学校教育への影響や大学等の負担なども踏まえつつ、適切な実施方法を検討。

※複数回実施のためには、IRTの導入が必須となることに留意

* 学習指導要領の改訂時期については、過去の改訂スケジュールから想定したものである。

高等学校において年次進行で実施するため、平成34年度に入学した生徒が3年生になる平成36年度から次期学習指導要領対応となる。

☆今後、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の具体的な作問イメージづくりを進めるに当たっては、先行する学力調査等も参考としつつ、特に重視して評価すべき「思考力・判断力・表現力等」を構成するより具体的な能力概念（思考プロセス）を明確化し、イメージを共有することが必要。

1. 先行調査で評価しようとしている能力等（思考力・判断力・表現力等）の例

I. 特定の課題に関する調査（論理的な思考）

【国立教育政策研究所】

＜論理的に思考する過程での活動＞

①規則、定義、条件等を理解し適用する

資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する

②必要な情報を抽出し、分析する

多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する

③趣旨や主張を把握し、評価する

資料は、全体としてどのような内容を述べているかを適確にとらえ、それについて評価する

④事象の関係性について洞察する

資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあるのかを見極める

⑤仮説を立て、検証する

前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する

⑥議論や論証の構造を判断する

議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する

※上記①～⑥のそれぞれの活動において、思考の過程や結論を適切に表現することを評価する問題も併せて出題

II. 全国学力・学習状況調査

【文部科学省】

【主として「活用」に関する問題の基本理念】

・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力

・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 など

○国語では、実生活の具体的な場面や生徒が授業などで実際に行っている言語活動を想定

○数学では、次のような数学的なプロセスを整理

- ・日常的な事象等を数学化すること
- ・情報を活用すること
- ・数学的に解釈することや表現すること
- ・問題解決のための構想を立て実践すること
- ・結果を評価し改善すること
- ・他の事象との関係を捉えること
- ・複数の事象を統合すること
- ・事象を多面的に見ること

III. PISA調査（3分野）【OECD】

【読解力】＜読む行為の側面＞

①情報へのアクセス・取り出し
情報を見つけ出し、選び出し、集める

②テキストの統合・解釈
テキストの中の異なる部分の関係を理解し、推論によりテキストの意味を理解する

③テキストの熟考・評価
テキストと自らの知識や経験を関連付けたり、テキストの情報と外部からの知識を関連付けたりしながら、テキストについて判断する

【数学的リテラシー】
＜数学的プロセスの側面＞

①定式化
数学を応用し、使う機会を特定することを含めて、提示された問題や課題を数学によって理解し、解決することができること

②適用
数学的に推論し、数学的概念・手順・事実・ツールを使って数学的に問題を解決すること

③解釈
数学的な解答や結果を検討し、問題の文脈の中でそれらを解釈すること

【科学的リテラシー】
＜科学的能力の側面＞

①科学的な疑問を認識する能力
与えられた状況において科学的に調査できるような疑問を認識すること

②現象を科学的に説明する能力
現象を科学的に記述し、解釈し、変化を予測すること

③科学的な証拠を用いる能力
科学的証拠を解釈し、結論を導き、伝達すること、結論の背景にある仮定や証拠、推論を特定すること

IV. PISA調査（問題解決能力調査）【OECD】

＜問題解決のプロセスの側面＞

①探究・理解
問題状況を観察し、情報を探究して、制約又は障壁を見つけ出す。与えられた情報及び問題状況を通じて、見つけ出した情報を理解していることが示される

②表現・定式化
問題状況の各側面を表現するために、表やグラフ、記号、言語を用いる。関連要素とその相互関係に関する仮説を立てる

③計画・実行
最終的な目標及びそれに向けての小さな目標を設定し、問題を解決するための計画又は方法を決定して、それに従い実行する

④観察・熟考
問題解決へと至るそれぞれの段階・過程を観察する。途中経過を確認し、想定していない出来事と遭遇した場合、必要な処置を行う。解決に至る方法を様々な観点から熟考し、想定や別の解決策を批判的に評価し、追加情報や明確化の必要性を認識し、進捗状況を適切な方法で報告する

2. 先行調査を踏まえた検討のたたき台の一例

(1) 「特定の課題に関する調査（論理的な思考）」調査（国立教育政策研究所）の枠組み

- 我が国のグローバル化の進展を踏まえ、また、学習指導要領においても思考力・判断力・表現力を育むことが重要とされる中で、特定の教科に依らず、高校生の論理的に思考する力の状況を把握・分析するための調査を実施。
- 高等学校第2年次を対象に、論理的に思考する過程での活動を設定し、各活動に係る出題を実施。
- 本調査の設計に当たっては、PISA調査、全国学力・学習状況調査、「法科大学院適性試験（平成23年から法科大学院全国統一適性試験）」等の枠組み等も参考にしつつ、活動や内容を整理。

- 以下は、国立教育政策研究所の調査の枠組みに「⑦思考の過程や結論を適切に表現する」を加えたもの。

論理的な思考の活動	論理的な思考の活動	具体的な内容
① 規則、定義、条件等を理解し適用する。	⑦ 思考の過程や結論を適切に表現する。	資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する。
② 必要な情報を抽出し、分析する。		多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する。
③ 趣旨や主張を把握し、評価する。		資料は、全体としてどのような内容を述べているのかを的確にとらえ、それについて評価する。
④ 事象の関係性について洞察する。		資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあるのかを見極める。
⑤ 仮説を立て、検証する。		前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する。
⑥ 議論や論証の構造を判断する。		議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する。

(2) 認知プロセスを以下のように分類して整理することも考えられる（以下は一例）

「問題解決」⇒①問題発見、②問題定義、③解法探索、④実行、⑤振り返り

「批判的思考」⇒①情報の明確化、②推論の基盤の検討、③推論、④行動決定・問題解決（メタ認知が全ステップに働く）

「帰納的推論」⇒①事例収集、②仮説形成（事例、目標、知識、期待の制約を受ける）、③一般化、④仮説検証（確証バイアスが最大の制約として働く）

「知識統合」⇒①アイデアを引き出す、②アイデアを付加する、③アイデアを選別・識別する、④振り返ってアイデアを分類・構造化する

① 「国語」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等のイメージ例

- 根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して意見を述べたり、自分の考えを文章にまとめたりする力
- 長い文章を課題に照らして的確に読み、趣旨を要約したり、抽象化したりする力
- 必要な情報を抽出し、それらの情報を組み合わせて構成する力
- 複数の文章や情報を比較しながら読み、内容の共通点や相違点、論理の構造をとらえる力
- 言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考えるなど論理的に思考する力
- 物事を推し量ったり、予測したりするなどの想像する力
- 豊かな語彙を用いて的確に表現する力

② 「数学」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等のイメージ例

- 確率や統計を用いて、傾向などを捉える力
- 類推・演繹・帰納などにより推論する力
- 事象を数学的にとらえ、論理的に思考する力
- 事象から本質を見だし、抽象化したり一般化したりする力
- 仮説を立て、検証する力
- 必要な情報を選択し、それを問題の解決に活用する力
- 数学的に解釈し表現する力
 - (例) 図やグラフを描く力
- データをとる力

③「理科（物理）」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等のイメージ例

- 自然事象の中に問題を見出し、観察・実験のための予想や仮説を立てる力
- 予想や仮説を確かめる観察・実験を計画・実施する力
- 観察・実験データを分析・解釈する力
 - （例）・結果についてモデルを使って考察し、表やグラフで表現する力
- 要因の抽出や観察・実験結果について推論する力
 - （例）・事象の変化に及ぼす要因を推論によって推測し、結果を予測する力
 - ・観察・実験結果を帰納的に推論して規則性や共通性を導く力
- 報告書の作成・発表・討論などを通じて表現する力

④「地歴（世界史）」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等のイメージ例

○日本を含む世界の文化の多様性や複合性と現代世界の特質を多面的・多角的に考察する力

(例)

- ・歴史上の出来事や事象の因果関係、歴史上の出来事と現在との関係を多面的・多角的に考察する力
- ・歴史の発展の多様な可能性や多様な解釈を根拠を元に考える力
- ・歴史資料をよみとき、資料としての適切性や妥当性を評価したり、判断したりする力
- ・歴史資料と歴史上の事象との関わりを推論する力
- ・歴史上の出来事を時系列的に分析したり、因果関係を分析したりする力
- ・歴史資料を活用して探究し、論述したり討論したりする力
- ・歴史を「過去の人々の意思決定の連鎖」として捉え、自らのこれからの意思決定に示唆を得る力

(参考) 「新しい高校地理・歴史教育の創造－グローバル化に対応した時空間認識の育成－」
(平成23年8月3日・日本学術会議提言) より

歴史的思考力育成の要点

- (ア) 過去への興味・関心の喚起
- (イ) 歴史的資料の調査力の育成
- (ウ) 歴史的分析・解釈力の育成
- (エ) 時系列的思考力の育成
- (オ) 意思決定の連鎖としての歴史学習

地理科目の今後の在り方について（検討素案）

参考資料2
平成27年6月9日
教育課程企画特別部会
資料2-2より

現行地理A科目

課題

①地理は選択必修で、選択者も世界史、日本史に比べて少ないことから、最低限の地理的技能をもたず高校を卒業する者が多い。

②地球環境の危機や防災に関する教育の必要性、地理的思考力や地理情報システム(GIS)などを利活用できるスキルの育成等が重要であるとの指摘。

③観察や調査・見学、体験を取り入れた授業等が十分に行われていない。

資質・能力

- 地理的な技能
「実践的な社会的スキルとしてのGIS活用」
- 地理的知識と地理的理解
「地球規模（グローバル）の自然システム、社会・経済システムの知識と理解」
- 地理的な見方や考え方
「空間概念を捉える力」
- 態度と価値観
「地域、国家的及び国際的な課題解決を模索する献身的努力」

（「ルツェルン宣言における『持続可能な開発を実行する地理的能力』による」）

新科目のイメージ

持続可能な社会づくりに必須となる地球規模の諸課題や、地域課題を解決する力を育む科目

- 地図や地理情報システムなどの汎用的な地理的技能の育成
- 位置と分布、場所、地域などの概念を捉える地理的な見方や考え方の育成
- グローバルな視点からの地域理解と課題解決的な学習の展開
- 持続可能な社会づくりに関わる資質・能力を育み、以降の地理学習等の基盤を形成

地理A

(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察

(2)生活圏の諸課題の地理的考察

<参考>

- ・中学校の地理的分野において充実した地誌学習により獲得した知識等を活用し、国内外の諸課題等を主題的に扱う。
- ・本科目履修後の地理歴史科の科目や他教科において活用できる、GISをはじめとする地理的な技能や、世界のグローバル化、持続可能な社会づくりといった考え方を身に付けさせる。

現行歴史系A科目

課題

資質・能力

新科目のイメージ

世界史A

- 1 世界史へのいざない
- 2 世界の一体化と日本
- 3 地球社会と日本

関連付け

日本史A

- 1 私たちの時代と歴史
- 2 近代の日本と世界
- 3 現代の日本と世界

①世界史や日本史の学習は大切だと考える生徒は増加。一方、近現代史の学習の定着状況が、他の指導内容に比べて低い傾向。

②世界史か日本史かの二者択一ではなく、グローバルな視野で現代世界とそこでの日本の過去と現在、未来を考える歴史認識を培うことが必要との指摘。

③調べたことを発表させる活動や課題解決的な学習を取り入れた授業等が十分に行われていない。

○自国のこと、グローバルなことを、横断的・相互的にとらえる力

○現代社会の形成過程を理解し、その諸課を考察する力

○持続可能な社会作りに参画する態度

○国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚

自国のこと、グローバルなことが影響しあったり、つながったりする歴史の諸相を学ぶ科目

- 日本の動向と世界の動きを関連付けて捉える。
- 現代的な課題につながる時代区分における、歴史の転換点等を捉えた学習を中心とする
- 歴史の転換の様子を捉える「継続と変化」、因果関係を捉える「原因と結果」、特色を捉える「類似と差異」などの、歴史の考察を促す概念を重視する
- 歴史の中に「問い」を見出し、資料に基づいて考察し、互いの考えを交流するなど、歴史の学び方を身に付ける

<参考>

現行中学校社会科の歴史的分野の学習では、我が国の歴史の大きな流れの理解をねらいとしている。
(各時代の特色を捉える学習他)

公民科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月9日
教育課程企画特別部会
資料2-2より

課題

資質・能力

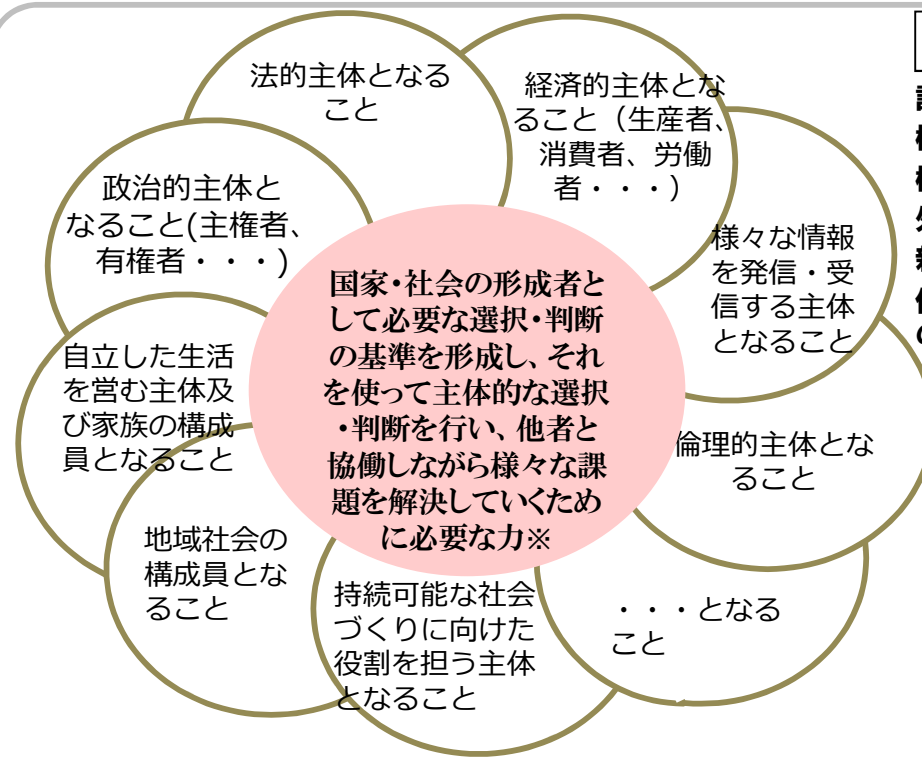
（新科目のイメージ）

学習活動の例

討論、ディベート
模擬投票、模擬選挙
模擬裁判
外部の専門家の講演
新聞を題材にした学習
体験活動、インターンシップ
の準備と振り返り・・・

関係する 専門家・機関

弁護士
選挙管理委員会
消費者センター
報道機関
留学生
企業 経済団体
起業家
NPO、NGO・・・



「公共」の扉（なぜ「公共」を学ぶのか）＜仮＞

社会的・職業的な自立や社会参画に向けた意識 アイデンティティ 自己実現・・・

様々な主体としての私たちの生き方＜仮＞

社会保障（年金、健康保険等） 情報 消費行動 契約 財政と納税 雇用 政治
参加（選挙等） 家族（制度的側面など） 自由・権利 責任・義務・・・

持続可能な社会づくりの主体としての私たち＜仮＞

文化と宗教の多様性 国際平和 社会的な課題発見・解決に向けた探究・・・

○立場によって意見の異なる様々な課題について、その背景にある考え方を踏まえてよりよい課題解決の在り方を協働的に考察し、公正に判断、合意形成する力

○様々な課題を捉え、考察するための基準となる概念や理論を習得する力

○公共的な事柄に自ら参画しようとする意欲や態度

○現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚

①積極的に社会参加する意欲が国際的に見て低い

②現代社会の諸課題等についての理念や概念の理解、情報活用能力、自己の生き方等に結びつけて考えることに課題

③課題解決的な学習が十分に行われていない

④キャリア教育の中核となる時間の設定

※新科目の構成においては、現行の関連する科目だけでなく、各教科・科目等との連携・役割分担を念頭に置きながら検討。
※具体的なスキル・リテラシーとしてどのような力を、どのような学習活動を通じて育むかという議論も必要。

＜参考＞

・学校における道徳教育は、…人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科の属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行わなければならない。（「高等学校学習指導要領総則第1款 教育課程編成の一般方針」）

理数科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月9日
教育課程企画特別部会
資料2-2より

普通科の場合

現 行 科 目	数学Ⅲ	数学B	数 学 活 用	科学と人間 生活	物理	化学	生物	地学	理 科 課 題 研 究
	数学Ⅱ	数学A			物理基礎	化学基礎	生物基礎	地学基礎	
	数学Ⅰ								

- ・ 数学活用：指導内容と日常生活や社会との関連及び探究する学習を重視。
- ・ 理科課題研究：知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視。先端科学や学際的領域に関する研究なども扱える。
- ・ 課題研究等の活動は生徒の論理的な思考を育成する効果が高いが、あまり開講されていない状況。（1割未満）
- ・ スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）で設定されている「サイエンス探究」等では、数学と理科で育成された能力を統合し、課題の発見・解決に探究的に取り組むことで高い教育効果。

【諮問文】より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための 新たな教科・科目の在り方について検討

資 質 ・ 能 力

○従来の数学と理科の各教科で求められていた資質・能力を統合した科学的な探究能力の育成を図る

◎専門的な知識と技能の深化，総合化を図り，より高度な思考力，判断力，表現力の育成を図る

○課題に徹底的に向き合い，考え抜いて行動する力の育成を図る

SSHにおける取組み事例なども参考にしつつ、数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな選択科目

改善の視点（案）

検討の方向性（案）

[全体的な課題]

- ・他教科等で活用できる汎用的なスキルを育成する必要がある。
- ・依然として、教科書教材に依存した、講義調の伝達型授業が中心となっている。

[主にコミュニケーション能力に関する課題]

- ・話合いや論述など、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習
指導が低調で、生徒のコミュニケーション能力の育成に課題がある。
- ・生徒の論理的な思考力（特に文章の内容を根拠に基づいて評価し、目的に応じて活用する力）に課題がある。
- ・静止画や動画における表現者の意図を解釈する力など、時代に対応したビジュアルリテラシーを育成することが必要。

[主に言語文化に関する課題]

- ・これまで継承され、実生活の中で形成されてきた言語文化についての深い理解や関心を高める学習に課題がある。（言語文化への興味・関心を高めるA科目の開設率が低い。）
- ・文法や古語など知識・理解の学習に偏る傾向があり、古典への興味・関心を高める学習指導に課題がある。
- ・学習指導が教科書教材の読解に偏る傾向があり、文学的文章の創作等の言語活動が十分行われておらず、想像力・創造力の育成に課題がある。

選択科目の在り方

現代文を中心に古文・漢文を含めて扱うなど、総合的な国語の能力を育成すること

論理的な文章(論説文・評論文、小論文等)を読んだり書いたりする力を育むこと

文学的な文章(小説、随筆・随想、脚本等)を読んだり書いたりする力を育むこと

古文・漢文等への理解を深め、言語文化への関心を高めること

共通必修科目の在り方

実社会・実生活に生きる国語の能力の育成

- ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」といった、表現に関わる能力の育成
- ・話合いや論述などの活動の重視
- ・静止画や動画も含む多様な表現の扱い

古典を含む我が国の言語文化に関する理解等を深めること

- ・古典に関わる言語文化についての理解と活用
- ・古典以外の文章に関わる言語文化についての理解と活用

共通教科「情報」（現行）

社会と情報

- 1 情報の活用と表現
- 2 情報通信ネットワークとコミュニケーション
- 3 情報社会の課題と情報モラル
- 4 望ましい情報社会の構築

いずれか1科目（2単位）を選択必修

情報の科学

- 1 コンピュータと情報通信ネットワーク
- 2 問題解決とコンピュータの活用
- 3 情報の管理と問題解決
- 4 情報技術の進展と情報モラル

改訂の必要性

高度な情報技術の進展に伴い、文理の別や卒業後の進路を問わず、**情報の科学的な理解に裏打ちされた情報活用能力**を身に付けることが重要

育成する資質・能力 「情報活用能力」

- 情報とそれを扱う技術を問題の発見・解決に活用するための科学的な考え方
- 情報通信ネットワークを用いて円滑にコミュニケーションを行う力
- 情報機器やネットワークを用いて情報を収集・加工・発信する力
- 情報モラル、知的財産の保護、情報安全等に対する実践的な態度
- 情報社会に主体的に参画し寄与する能力と態度

新科目のイメージ

情報と情報技術を用いた問題の発見と解決に活用するための科学的な考え方等を育成する科目

- コンピュータと情報通信ネットワーク
- 問題解決の考え方と方法
- 問題解決とコンピュータの活用
- 情報社会の発展と情報モラル

上記科目の履修を前提とした発展的な内容の科目についても検討

※情報モラルなど、社会生活を営むに当たり必要な知識や果たすべき役割等については、新たな公民科目で扱うことを検討。

関連して、現行中学校技術・家庭（技術分野）における「情報に関する技術」の指導内容の充実、及び小・中学校段階からの各教科等における情報活用能力を育成するための指導の充実についても、検討が必要。

（次ページ「小・中・高等学校を通じた情報活用能力の育成」を参照（略））

英語科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月9日
教育課程企画特別部会
資料2-2より

現行科目

コミュニケーション英語基礎

課題

コミュニケーション英語Ⅰ

(必修)

コミュニケーション英語Ⅱ

コミュニケーション英語Ⅲ

英語表現Ⅰ

英語表現Ⅱ

英語会話

- ・生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題
- ・英語の学習意欲に課題
- ・言語活動、特に、統合型の言語活動（例：聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動）が十分ではない
- ・グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要

発信力が弱い

資質・能力

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養う

科目の在り方

英語による「思考力・判断力・表現力を高める見直し」

4技能統合型（必修科目を含む）の科目を核とする科目

- ・4技能総合型
- ・複数の技能を統合させた言語活動が中心

世界標準になっているCEFRを参考に、指標形式での目標設定を検討

発信能力の育成をさらに強化する科目

- ・スピーチ、プレゼンテーション、ディベートやディスカッションなど、統合型言語活動が中心

高度化・多様化

生徒が実社会や実生活の中で、自らが課題を発見し、主体的・協働的に探求し、英語で考えや気持ちを互いに伝え合うことを目的とした学習

改訂の方向性（案）

問題発見・解決力のための分析的読解による連動型複数選択問題方式

問題発見・解決の考え方や事例を含む複数の文章を読み、そこで語られている考え方・取り組み方の共通パターンを分析して回答する問題。回答においては、「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせが正しく選択できているかを採点する。正答となる組み合わせは、複数可能とする。

問題発見
解決力

様々な分野における問題発見・解決の考え方や事例を扱う。

分析的読解

複数の文章を読み、そこで語られている内容の共通パターンを分析する。

連動型
複数選択問題

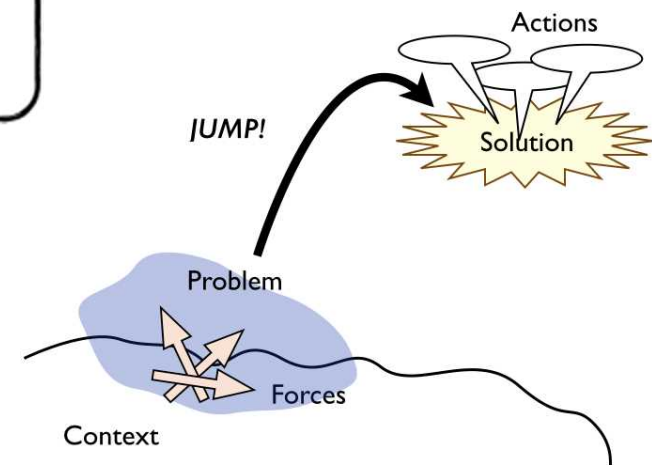
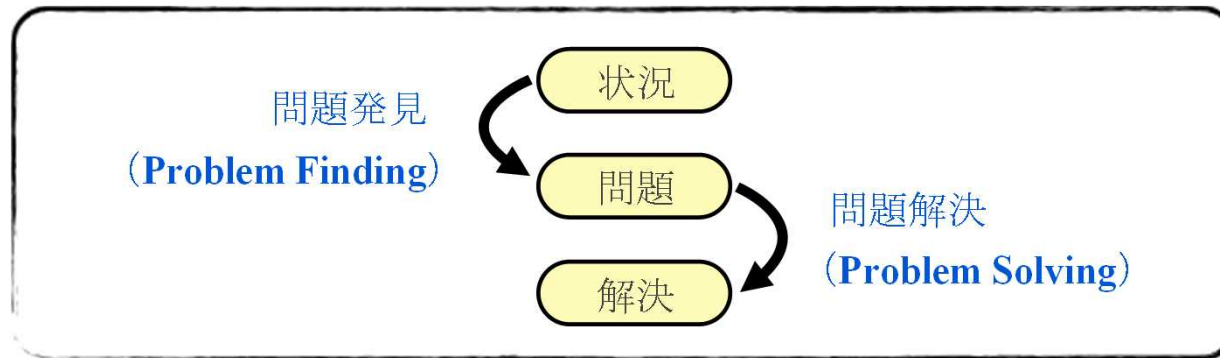
「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせで回答する。

問題発見
解決力

様々な分野における問題発見・解決の考え方や事例を扱う。

実践における問題発見・問題解決のパターンの分析・活用

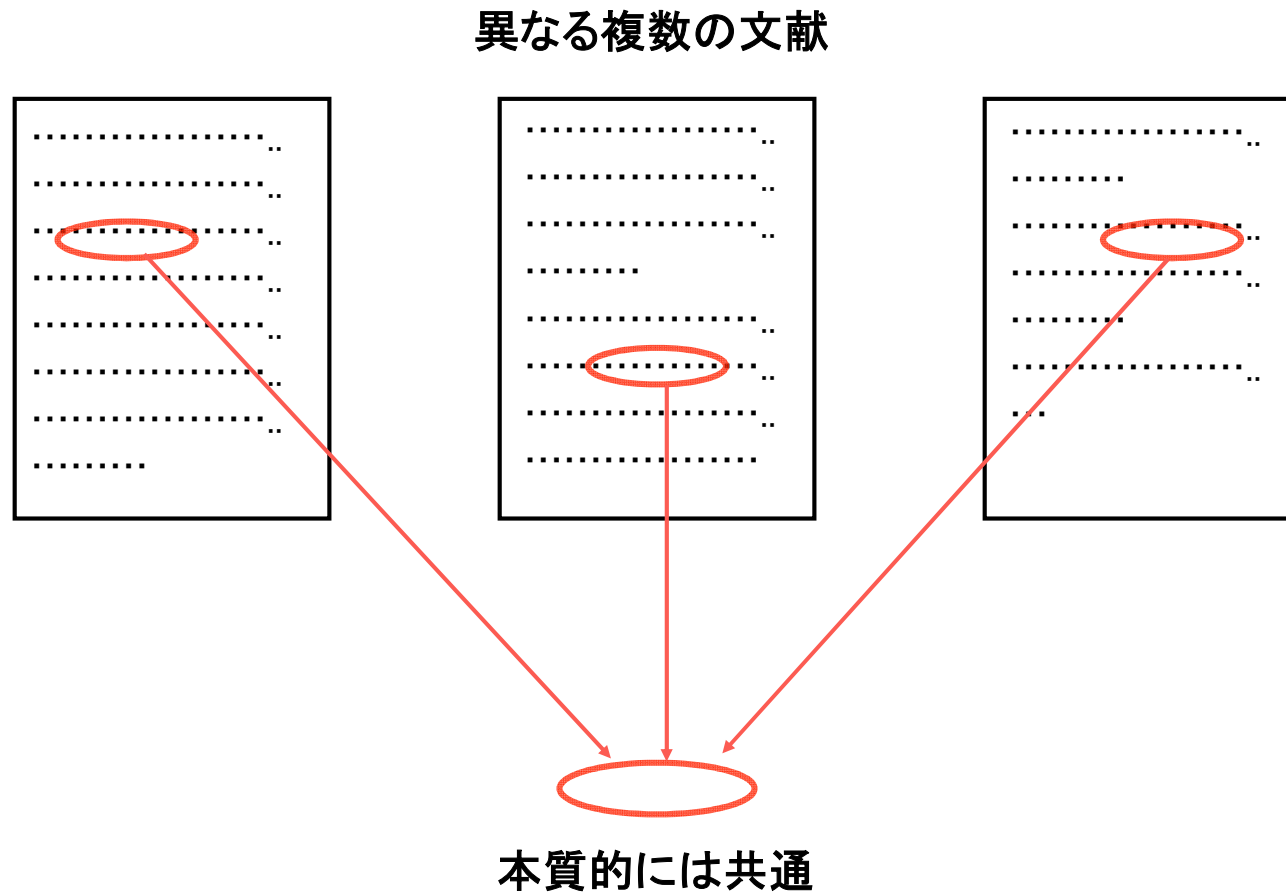
- ・どのような状況（Context）のときに
- ・どのような問題（Problem）が生じやすく
- ・それをどのように解決すればよいのか（Solution）



分析的読解

複数の文章を読み、そこで語られている内容の共通パターンを分析する。

本質の分析的抽出と、異なる事例でのアナロジー



連動型
複数選択問題

「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせで回答する。

